

日本中東学会ニューズレター

**JAMES
NEWSLETTER**



No.115
10/10 2008

目 次

第 14 回公開講演会	
「イスラームから多文化共生を考える」のお知らせ	1
第 25 回年次大会研究発表の募集.....	3
アジア中東学会連合 (AFMA) 第 7 回大会参加記	4
AFMA の新たな飛躍、展開.....	4
モンゴルと日本をつなぐ——説話、人、ネットワークの拡大..9	
中東研究史の違いを越えて	11
新風息吹くウランバートル	12
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告	14
会員の異動.....	15
寄贈図書.....	16
事務局より	17
編集後記.....	17
会費納入のお願い	18

第 14 回公開講演会「イスラームから多文化共生を考える」のお知らせ

下記により日本中東学会第 14 回公開講演会を実施いたします。

皆様のご参加をお待ち申し上げます。また、所属機関等関係先への広報をお願い申し上げます。ポスター (B2 判) の送付をご希望の場合には、学会までご連絡ください。

<趣旨>

グローバル化が進む現代において、日本を含む世界にとって、「イスラーム」との共存は重要かつ緊急な課題であることは、すでに誰もが認識する時代となりましたが、「イスラーム」との共存は、国際的な課題であるとともに、国内的な課題でもあります。日本では、近年、イスラーム諸国で働き学ぶ日本人、日本で働き学び、そして家族形成をするイスラーム諸国出身のイスラーム教徒が増えています。また、それと並行して日本人のイスラーム教徒も増えており、日常生活のレベルでの交流は着実に進んでいます。

こうした現状を踏まえ、基調講演では、仏教界の指導者であるとともに、イスラーム史研究のパイオニアでもある森本公誠氏が、日本人、とりわけ仏教徒から見たイスラームの普遍性と特殊性を論じます。つづくパネルでは、日本に暮らす外国人イスラーム教徒ならびに日本人イスラーム教徒の立場や視点から、日本における多文化共生の可能性や課題を、具体的かつ日常的なレベルで考えます。皆様、どうぞ秋の神戸にお越しください。(桜井啓子)

日時： 2008年10月25日(土)13:30-17:30(開場 13:15)

会場： 神戸国際会館 402号会議室

〒 651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通 8-1-6

Tel: 078-231-8161(代表) Fax: 078-231-8120

JR三ノ宮駅より徒歩3分、阪急三宮駅より徒歩3分、阪神三宮駅より徒歩2分、神戸市営地下鉄山手線三宮駅より徒歩5分、神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅と直結

<http://www.kih.co.jp/>

プログラム

基調講演

森本公誠(東大寺長老)「仏教から見たイスラーム——イスラーム史を学んで」

パネル「イスラームから多文化共生を考える」

店田廣文(早稲田大学教授)「外国人イスラーム教徒の生活実態——アンケート調査の結果から」

貞好康志(神戸大学准教授)「イスラームと日本社会——イスラーム教徒の視点から」

河田尚子(聖トマス大学非常勤講師)「イスラームと女性——日本人イスラーム教徒の視点から」

質疑応答・議論

第 25 回年次大会研究発表の募集

来年度の年次大会は、2009年5月16日(土)・17日(日)に開催されます。

会場は、1日目が広島市内中心部の広島国際会議場、2日目が市の郊外の広島市立大学となります。この二つの会場はかなり離れていますので、参加を予定されている皆様には、各機関のホームページで所在地をご確認いただくようお願い申し上げます。

広島国際会議場：<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/icch/>

広島市立大学：<http://www.hiroshima-cu.ac.jp/>

なお会場へのアクセス方法については、来年 4 月に正式プログラムとともにご案内いたします。

例年どおり 2 日目は研究発表です。

1. 研究発表

研究発表を希望される方は、12月12日(金)までの間に年次大会実行委員会までご応募ください。その際、①発表のおおよその骨子を添付して下さい(日本語で400字、欧文の場合は200語程度。内容とテーマが分かるもの。正式の「要旨」は、プログラム確定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります)。②使用希望機器をお申し出下さい(プロジェクタ等の台数に限りがありますが、可能な限りご希望に応えるようにします)。

2. 企画セッション

第25回年次大会では、会員による企画セッションも公募します。特定のテーマについてセッションの企画をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。

持ち時間は2時間15分で、発表者は3から4名です。コメンテーター(討論者)をつけるかどうかは自由ですが、司会者は必ず1名必要です。発表者と司会者は日本中東学会会員であることとしますが、コメンテーターはこの限りではありません。企画者は、①企画セッションのタイトル、②企画の趣旨(日本語で400字程度、欧文の場合200語程度)、③参加者の一覧、④各発表者の発表の骨子(趣旨文と同様の分量)、⑤使用希望機器、を年次大会実行委員会事務局宛にお送りください。司会者とコメンテーターは応募の時点で確定していなくてもかまいません。なお、調整の都合上、企画の内容について、事務局から適宜問い合わせ・ご相談をさせていただくことがあります。

3. 託児所

託児所の利用を希望される方は、大会実行委員会事務局までお申し出ください。どうぞよろしくようお願い申し上げます。

連絡先

日本中東学会第 25 回年次大会実行委員会事務局

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東 1-1-1

広島修道大学 堀井優研究室

TEL: 082-830-1226 FAX: 082-848-2765 (共用)

E-mail: james2009@am25.intl.hiroshima-cu.ac.jp

*可能な限りメールでご連絡・お問い合わせいただければ幸いです。

(宇野昌樹)

アジア中東学会連合 (AFMA) 第 7 回大会参加記

AFMA の新たな飛躍、展開

モンゴルで9月5～6日に開催された第7回 AFMA 大会を一言でいえば、「AFMA の新たな飛躍、展開」ということです。大会はモンゴル国立大学やモンゴル外務省アラビストなどの参加もえて、たいへん盛況かつスムーズなもので、大成功といえました。結成4年、AFMA 参加から2年の MAMES にしては、大進歩です。

今回の AFMA が次のステージへの「飛躍」であったというのは、AFMA が持つ、中東研究がまだまだ組織化されていない国々での中東研究育成、支援、協力という役割が改めて実感されたということです。それは特に、MAMES を中心に、これまで2年に1回だった AFMA 大会を年次大会にしたらどうか、という意見が積極的に交わされるようになったことから、わかります。そこにはある意味で、AFMA 設立の最初の精神が、再び発揮されているといえます。MAMES の成長を見ることは、AFMA の存在意義を大きく認識させてくれるものであり、今後も AFMA のこうした役割を積極的に考えていくことが重要だと、心底感じさせられました。

しかも MAMES は、今後ロシアにも中東学会の設立を促したい、暁にはアジア中東学会連合に参加してもらいたいと、夢を広げていました。今後は東南アジア諸国での中東学会設立もありえるでしょう。AFMA の方向性をどう考えるかは、理事会を中心に日本中東学会でも十分に議論していく必要があります。

中東研究を始めたばかりで大仕事を無事、成功裏に終えた MAMES の意気込みと熱意、研究向上への渴望感は、参加したすべての中東学会がひしひしと感じたことと思います。それは学会活動の先行組であるわれわれには、若々しいかつての意気込みを思い起こさせてくれるものですし、若い世代には、学会版ウルルン体験記だったと思います。

以下、国際交流委員長のモンゴル紀行をお送りします。(これを読めば、みなさんも行きたくなること請け合いです。)

<行くまで>

開催前、国際交流委員長として一番やきもきさせられたのは、本当にモンゴルで AFMA 大会が開催されるのだろうか、という心配だった。とにかく、決定が遅かった。申請していた国際交流基金の助成も、得られなかったし、MAMES から正式な開催決定の連絡があったのは、6 月後半になってからである。なんといってもショートノーティスだし、しかも予算がなく参加は自腹で、という条件だったことで、国際交流委員長としてはとにかく、どれだけ参加者が集まるかが、一番心配だった。

しかし、MAMES のニャムザグド会長が 2 年前に来日したとき、大会開催に並々ならぬ意気込みを示し、当時の三浦会長と酒井に「くれぐれもサポートを頼む」といっていたことを考えれば、なんとか会を賑わわせたい。幸い JAMES 会員に声をかけた結果、若手 2 人、中堅 1 人、元理事 1 人、理事会からは会長、事務局長を含め 3 人と、なかなかバランスの取れた参加となった。韓国からの参加者も、現会長も元会長クラスをずらりと揃えて 5 人だった。残念ながら中国は、会長、副会長ともに在外、病気ということで参加が危ぶまれたが、唯一、事務局次長が参加した。

<到着、モンゴルの印象>

モンゴルの第一印象は、物理的にも文化的にも旧ソ連中央アジアと東アジアの中間点、という感じである。20 年前のシリア、イラクなど、社会主義色の強い中東の国、というところか。キリル文字の氾濫が、旧ソ連圏に来たという印象を強める。

しかし、仏教寺院の壮大さに驚かされる。特に解説してくれた学生やモンゴル大学教員の話では、脱社会主義化以降、急速に仏教が復興しているのだそうだ。訪問した寺院のひとつは 1999 年、社会主義体制の規制が外れたのちに建設されたチベット仏教寺院であったが、ここには、ダライラマの写真がいたるところに掲げられていた。同時に、最近韓国のキリスト教布教が激しい、と指摘する学者もいた。韓国キリスト教会は慈善事業を行うため貧困層に浸透し、キリスト教徒人口が増えているという。加えて、アニミズムもまた、民間信仰で復活しているらしい。脱社会主義体制下での宗教復興が、さまざまな形で現れていて、たいへんおもしろい。20 年若ければ、モンゴル研究に転向していたかもな、と真剣に考えたものである。

一方、モンゴルのムスリムについては、ウランバートルをざっと見回した限り、イスラームにまつわる光景は見られない。モスクはなく、中東諸国の会社、看板などもない。唯一プレゼンスが大きく目についたのは、トルコだった。アタティルク通り、アタティルク像、トルコ文化施設などが目に付いた。

モンゴルのムスリムは、カザフ人とホートゥン人だが、学生のなかには、地方出身ということでカザフ人に対する差別的な反応を示す者もいた。とはいえ、大学や外務省、および MAMES には、カザフ人が少なからず見られた。外務省のアラビスト外交官のひとりにはエジプト駐在経験があるということだったが、それは自身が

カザフ人だということと大きく関連しているという。またお会いしなかったが、MAMES 副会長はホートウンのムスリムで、数学が専門の先生だが個人的にイスラーム研究に関心あって MAMES に入っているという。

<AFMA 大会の内容>

MAMES 以外の海外からの AFMA 参加者は 13 人、MAMES の幹部を入れても 16 人で、いったい大会にはどの程度の参加者になるのだろう、と、正直、最初は心配であった。ところがふたを開けてみると、会場(初日の会場は、日本モンゴル文化センターであった。受付には日本語を勉強しているモンゴル人学生が動員されていた)には 40 人は優に集まっている。MAMES の中核を占める国立モンゴル大学外交関係学部、商業経済研究所に加えて、外務省、観光関係者など、モンゴル側の参加者は多岐に渡った。

なにより驚いたのは、外務省は当然英語の質が非常に高いのは当然としても、モンゴル大外交関係学部の若手研究員、学生は、びっくりするほど英語が上手だということである。社会主義時代、研究者はほとんどがロシア語の教育を受け、留学経験もモスクワであったが、80年代生まれ以降は、ほとんど第1外国語として英語を選択し、英語熱が高いという。そのことは、旧世代にも刺激を与えているようで、MAMES 幹部も英語での報告をがんばってやらなきゃ、としきりに話していた。

1 日目の特別セッションは、恒例によって各学会会長が報告を行ったのだが、加えてモンゴル外務省およびモンゴル大外交関係学部の研究員がモンゴルの中東政策について報告した。後者の報告者は、モンゴル軍のイラク派兵の中核にいた人物である。モンゴル軍の派兵は、モンゴルにとって対中東関係を考えるひとつの大きな契機になったようだ。

各学会会長からの報告は、共通テーマたるそれぞれの国の対中東政策、中東研究の動向報告だった。だが質疑の場で、KAMES のシム氏が中国の殷氏に、中国がモンゴル全体を自国領視しているのでは、という質問を行って、緊張感が漂った。そこはモンゴル側、中国側ともに、そんなことはないという配慮に富んだ回答で受け流したが、今回の AFMA はとりわけ、中国とモンゴル・韓国の緊張関係があちこちで顔を出した大会であった。

大会に参加していたモンゴル人大学生のなかには、はっきりとした中国に対する危機感を露にする者もいる。彼らがしばしば指摘したのが、昨今のモンゴルのナショナリズムの高揚だ。北京オリンピックでモンゴルは初めて金メダルを獲得したが、このとき国内で始めて、自発的に人々が街にでてモンゴル国旗を掲げ、民衆が一丸となって金メダル獲得を喜んだ。初めての自発的なナショナリズムの高揚で、それまで政府が主導する国威高揚とは全く異なる現象だったという。

2 日目は、モンゴル大学外交関係学部のキャンパスで実施されたが、セッション

はテーマごとに四つに分かれた。赤堀氏の報告は社会セッションに入っていたが、経済セッションには遊牧経済についての経済理論を使った報告や、ラクダ乳産業を取り上げた報告があり、少々セッション構成が機械的かなという難点はあったものの、いずれのセッションも KAMES ないし JAMES の報告と MAMES の報告を組み合わせ、セッションの3分の1から半分はモンゴル人の報告にしようという意図は、たいへん高く評価できる。

モンゴルからの報告者のほとんどが、中東を専門にやってきたものではない。国際政治が専門で最近中東関連の研究事業に加わった、という類の研究者がほとんどであった。なによりも3ヶ月前に AFMA 開催を決めて、研究蓄積がない学者や学生に報告をさせるのだから、かなり無理があることは事実である。しかし、MAMES 事務局が、とにかく中東についてみんな報告しようよ、と、渋る同僚たちのお尻を叩いてまわったのだそうである。おかげで多くのモンゴルからの報告者が集まったのである。

とりわけ私が印象的だったのは、ゴビ砂漠でのラクダ乳産業についてフィールドを行った研究者の報告だった。報告者が MAMES 事務局から報告依頼を受けたときに、「自分は英語も話せないし、モンゴルのラクダを研究していても中東とは関係ないから」と固辞しようとしたそうである。しかし MAMES 事務局は、「フィールドをやっているのは大きな強みだから、ぜひ報告してくれ」と頼み込んで報告してもらったそうである。この感覚は、正しい、と思った。初期のわが中東学会の年次大会に、しばしば砂漠農業や植生などの理系の研究報告があったが、そうした幅の広がりを出させる報告で、発想の豊かさを改めて見直した。

学生たちの反応から感じられたのは、とにかく学生にとっては「国際学会」というものに接するには初めてで、なんでも見てやろう的に参加していたのだろう、ということである。外務省スタッフですら、「中東に関して国際会議がモンゴルで開催されたのは始めてだ」と感心していたほどである。MAMES 事務局は、「自分たちの研究がまだまだ欧米の国際学会にもっていけるレベルではないことはよくわかっている。だからこういう形でとにもかくにも英語で発表が聞ける、話せる機会はとても貴重だ」といつていたが、AFMA に課された課題は、まさにそうしたことだと感じた。2年前に外大で開催した際、途上国からの留学生に手伝いを頼んだが、彼らもまた、「国際学会とはこういうふうに運営するものか」と感銘を受け、勉強になったといつていた。それだけでも、やる意義を感じたものである。

ところで、MAMES 事務局のなかには、モンゴルと中央アジアをつなぐネットワークを確立したいと考える者も少なくない。中央アジアへの学問的関心は、潜在的に高い。今回の日本からの参加に、中央アジア研究者が参加していればよかった、とつくづく感じた次第である。



<AFMA 理事会>

AFMA 理事会が 1 日目の最後に行われたが、そこでは次の AFMA 幹事学会は CAMES に、次回の AFMA 大会開催は中国に、ということが決定された。ただ KAMES、MAMES が強く AFMA 大会の年次開催を主張、次回開催予定の CAMES に強く 2009 年の開催を要求した。とりあえず次回は 2 年後の 2010 年の開催を予定することとし、その後は 1 年ごとという方向で考えることになった。日本中東学会としても理事会で考えていく課題だろう。

さらに、MAMES と KAMES は、ロシア中東学会の参加を積極的に呼びかけた。ロシアの中東研究者といっても、対象として考えられているのは、アジア系、モンゴル系のロシア人である。そもそもロシアに中東学会が開設できるかどうか促し、その上で次回の中国での AFMA 大会で承認を予定、ということでとりあえず決着がついた。

また、AFMA のウェブサイトの立ち上げが承認された。すでに以下のサイトが公開されているので、みなさんもお覧ください。

<http://mideast.site90.com/afma/>

<大会後のエクスカージョン>

今回は、1 日目に短時間の市内観光、2 日目に郊外ツアーが夕方から夜にかけて組まれていた。3 日目にはオプションだが、1 日の郊外ツアーもあり、韓国、日本が参加した。

このツアー、どれもとにかくすばらしかった。1 日目のレセプションではホテルの宴会場でビュッフェに民族舞踏が加わったが、地方の遊牧民家族が呼ばれ、とても珍しいダンスが披露された。2 日目のツアーは、ウランバートルから 1 時間ほどいったところの地方のツーリストキャンプとして開発中の観光サイトで、ゲルを訪問し、レストランで会食するというものだった。ダンスも観光サイトも、ニヤムザグド会長の生徒のひとりが観光事業をやっていて、その関係で MAMES に参加、全面的に協力したために実現したものらしい。このあたり、会長の人脈の広さの絶大さを感じさせる。

ともあれ、いずれのツアーも、実に見事にオーズナイズされ、モンゴルの伝統、歴史、文化を十二分に堪能した。オプションツアーでは建設中の 13 世紀の歴史を展示した各種ゲルが散在するサイトを訪れたが、乗馬あり、弓矢あり、文化歴史の勉強あり、ゲルでの伝統的モンゴル料理の昼食あり、モンゴル伝統音楽の実演あり、日本にはとうてい逆立ちしても対抗できない観光資源をふんだんに盛り込んでくれた。こういう分野が、日本ではできにくく、難しい。北京オリンピックのあとのロンドンの「地味オリンピック」宣言の気持ちがよくわかる。

余談だが、バスの中や郊外のレストランでの会食中に一大歌声喫茶になったのも余興であった。ロシア研究者も交えて、すべての参加者が歌えた歌がロシア民謡

だったというのは、なかなか興味深い。日本からの参加者は、残念ながら覚えている歌の数で負けていたが、カラオケの普及で歌詞を覚えなくなったというのは、どうも韓国、モンゴルいづこも同じらしい。

ともあれ、この郊外ツアーで参加者の腹藏ない人間関係の構築ができたことは、偉大な成果である。

<今後の協力>

すべての会見において、モンゴル側の、中東研究、ひいては国際政治全般について、もっと交流を深めたい、との期待が強く感じられた。研究報告大会ののち、MAMES 事務局やモンゴル大学外交関係学部学部長とお会いしたが、中東研究者が日本からモンゴルに来て講演などをしてもらえるとうれしい、と強調していた。今後日本の中東研究者がその知見を披露するためにモンゴルを訪問するのは、たいへん意義があることと思われる。さまざまな意味で刺激を受ける、良い機会だろう。(酒井啓子)

モンゴルと日本をつなぐ——説話、人、ネットワークの拡大

関西空港からウランバートルへのモンゴル航空直行便は、私たちが向かう直前の8月29日がラスト・フライトとなったという、惜しい時期だった。ソウル・インチョン空港で乗り継いだ大韓航空でウランバートルに着いたのは9月4日の夜、小雨が降り身震いする寒さだった。

韓国の釜山外国語大学で開催された第5回 AFMA 大会の折りに初めて、モンゴル中東学会がこれより参加するという話をきいた。MAMES という響きの可愛らしさに日本人参加者からつい笑いがこぼれ、「モンゴルが参加するなら大会がウランバートルであるかも」という話が出たのがついこの間のことのような気がした。ウランバートルでの大会が本当のものとなっていよいよ開催される。

開会式は市内のモンゴル・日本センターで行われた。朝、会場に入る時はあまり人がいなかったが、昼食に出るときにはエントランスホールにはたくさんの人たちがいて、日本や日本語への関心の高さを目の当たりにした。私が去年担当した大学院博士課程の講義でも、日本人学生よりモンゴル人学生のほうが圧倒的に多く、留学生の入試に立ち会ってもモンゴルの人が多い。じっさいは彼・彼女らは中国内蒙古の人たちが多く、国籍は中国で、政治的な理由でそこでは研究ができないモンゴル研究などを日本に来てしているときいている。

午後は、7月の選挙がらみの暴動で焼けた与党本部の建物を見ながら、その隣のウランバートル・ホテルで昼食をいただき、市内観光、そのあとチンギス・ハーン・ホテルでの晚餐となった。テーブルに並べられた名産のウォッカもチンギス・ハーンといい、「トクトイ」(乾杯)がなんども繰り返された。

6日は朝から研究発表が続いた。直前にこちらからパワー・ポイントが使えるかを問い合わせたところ、発表会場両方で使えるように準備するとのことで一安心して行ったのだが、PCとプロジェクタがうまく合わず、朝いちばんだった私の発表は機械の設定に手間取り30分近く遅れて始まった。パワー・ポイント用のプロジェクタは適ったのだが、窓からふりそそぐ陽光にスクリーンに映る画像は幽霊の写真のようになり、テーマである羽衣説話にまつわる写真提示は思ったようにはいかなかった。またハンドアウトのコピーが間に合わず、キーワードを箇条書きにしたものなど、発表に必要な資料が手元にないという状態で(これは私が印刷したものを日本から持っていかなかったのがいけないのだが)、じゅうぶんに思うところが述べられた発表だったとは言えないのが残念だった。

発表テーマは羽衣説話の国際比較で、「千一夜物語」にみられる2話と、日本の謡曲「羽衣」や「伊香刀美」を中心に、今回は化身である「鳥」や七夕説話にも話題をひろげて論じておきたかった。とくに七夕説話は、君島久子氏の研究によると、中国の、かなりモンゴルに近いところにも見られるので、モンゴルにもその話があります、というリアクションを期待していたのだが、会場ではそのような話はず、個人的にパーティーの席などで何人かの方に聞いてみても七夕の話は知らないということだった。絵本でもないものかと書店に行ってみたかったが、結局ちゃんとした書店には行く機会は得られなかった。

開会式の日や研究発表の会場では、学生さんたちがお茶の接待をしてくれる。このような機会があまりないらしく、慣れない様子で、それでも一所懸命に歓待の気持ちを表してくれるのが嬉しい。英語のできる学生さんたちが発表会場に動員されていたようで、必ずしも中東研究をしている、あるいは中東問題に興味があるという人たちではなかったのが質疑応答の場でわかった。「中東やイスラームといえばテロでこわいイメージだ」「どうすればテロはなくなるか」という質問が出たが、これは私が全学部向けに担当している中東研究の講義でいちばん最初に学生が「中東について知っていること・知りたいこと」というテーマで書いてくるレポートの内容で圧倒的に多いものである。日本の学生もモンゴルの学生も、同じようなことを考えているのだなと思い、モンゴル国内での中東についての報道の仕方などにこちらが興味を持った。以前、同僚のモンゴル語専攻の教員が「モンゴルもイラクに派兵してるのよ、16人ほどね」と言っていたが、国内での世論や質問にあったような中東に対するイメージはどのようなものだろう。

ちなみにこの同僚とはインチョンからウランバートルへの飛行機で一緒になり、私を見て驚いた彼女は「これ、ウランバートル行きだけど」とわざわざ話をしにきてくれた。さらにこの同僚の師にあたる世代、もう定年退職されたモンゴル語専攻の名誉教授と元外国人教員のお二方に市内観光の途中、自然史博物館で偶然お会いした。よく(旧)外大では日本で滅多に話さない人と海外で会って話せる不思議

なネットワークがあると言われていたが、まさにその不思議を経験でき、(旧)外大ネットワーク恐るべしやな・・・と痛感した。

研究発表の後は、いただいたプログラムによると「キャンプに移動してレセプション」とある。しかも移動に1時間の時間を予定している。いったいどこに、どんなキャンプに行くのだろうか?と思いながらバスに乗り、草原に向かう。やがて道なき道になり小川までバスで渡って、ロッジ風の宿泊施設に着いた。遊牧民料理というべきぶつ切り羊肉の塩ゆでやミルク茶がふるまわれ、一大演芸大会(?)になった。歌詞を覚えなくてもカラオケのモニター画面を見ればよく、音楽は iPod で個々に好きなものを聴く時代になっている日本だが、「身体による伝承」という、いま私のいる研究科の講座でのひとつのテーマを、韓国やモンゴル、ロシアの歌を聞きながら考えさせられた。ロッジを出た夜空は、天球儀そのままのまるさで透き通っていて、うつくしいものだった。

翌7日のエクスカージョンは、書けば紙幅を取りすぎるだろうからここでは割愛する。草原ツアーで最初に訪れたリレー・ステーション・キャンプの入り口に、吉野ヶ里遺跡の復元集落の入り口にあったのとそっくりな「鳥居」を見たのに驚き、何度もカメラのシャッターを切ったことだけ、いまは書いておく。羽衣説話のキーワードとして「鳥」を挙げたが、天地の間、宙を行き来する鳥について今後考えるときの良い材料に出会えた。

AFMA 大会は今回で7回になる。韓国中東学会の方々とはもうだいぶ馴染みになっているが、これからモンゴルやロシアの中東研究者の方々とも情報を交換しあったり訪問し合ったりして交流が広がり深まっていくことを願う。また韓国の SHIM 先生が、やがてマレーシアやカザフスタンの参加も考えているとおっしゃったことも印象に残っている。

さいごに、国際会議の経験が少なく慣れないなかで、開催校や MAMES の方々、協力してくれた学生さんたちの、大会を成功させようという思いと細やかで暖かい歓迎の気持ちにはこころ打たれるものがあつた。語り尽くせない感謝の念をこめて。

(岡本久美子)

中東研究史の違いを越えて

2日間に渡って行なわれたアジア中東学会連合第7回大会(於ウランバートル)は、初日9月5日に日本、韓国、中国、モンゴルの各中東学会の代表によるパネル発表が、翌6日には各国の研究者による個人の研究発表が行なわれる形で進められた。主催の中心はモンゴル国立大学のスタッフである。モンゴルは中東研究の興りが他の3国と比べると最近である為、同大の国際関係学部を中心として専攻・分野の別を問わずに、それこそスタッフを総動員して大会運営に携わってくれた。

4カ国の中東学会による学術的交流ということであれば、中心となるのは6日の個人研究発表と言えようか。午前と午後にそれぞれ2つ、計4つのテーマ別セッションの場が用意され、筆者はその内の第2セッション「歴史と文化」に発表者の一人として参加した。同セッションは日本人発表者2名とモンゴル国立大学からの発表者2名が予定されていたが、後者の内1名は欠席となり、合計3つの研究発表とやや物寂しい感じではあった。日本人参加者による発表は、岡本発表が「羽衣伝説」を始めとする民話のアジアにおける広がり、『千夜一夜物語』との関連を、そして高尾発表がシリアのイスラーム学者、アフマド・クフターローが日本の神道系教団・大本(おほもと)と行なった宗教間対話の活動を取り扱い、いずれも日本をその舞台の1つとする報告を行なった。その為、議論の際には内容に直接関係するものとは別に、日本に関する派生的な情報についての質問がしばしば出た。とはいえ、岡本発表は民話に関する中国の事例とその考察を含んでいたため、テーマや関心の共有がスムーズに計られていたように思われる。そして同セッション最後の発表は、モンゴル国立大学のスタッフで大会運営にも尽力してくれた Oyunsuren 氏による13世紀のモンゴル外交史に関するものであった。この発表に関しては、同じ歴史学を専門とする私市氏が議論の口火を切った。

各発表の内容についてその都度丁寧な整理をしてくれたモンゴル国立大学の Munkh-Ochir 氏には頭が下がる。予想の範囲内ではあったが、セッションがテーマ別に分けられていたとは言え、各発表の取り扱う内容は題材や方法、地域や時代という点であまりに多様であった。その為、各発表は報告の際にも質疑応答の際にも「紹介」のような形を取らざるを得ない時もあった。但しこの理由としては、各発表者の専門の差異以上に、参加4カ国における中東研究の歴史に見られるその出発点や需給の差異も挙げられるべきであろう。それを考えると前日のパネル発表、また他の幾つかの個人発表が、参加各国における中東研究史の特徴について端的に説明していたことは、今後の AFMA 大会にあたって運営準備の段階から生きてくることと思われる。

ところで、この大会にはその内容が事前に全く知らされていない、「3日目」もあった。滞在中、報告や発表の場以外にも参加4カ国の中東研究者が交流する機会を多く与えて頂き、モンゴル中東学会及び大会に携わったモンゴル側のスタッフには厚く御礼申し上げたい。
(高尾賢一郎)

新風息吹くウランバートル

初日(9月5日)の特別部会、2日目(9月6日)の第1~3部会については、他の参加会員の報告に譲り、自身が発表者であった第4部会について主に報告する。

この部会は社会関連の主題に沿った報告を集めたものとされ、4本の発表がなされた。司会を務めた国立モンゴル大学の J. Bayasakh 氏は、ご専門は中国研究で、

モンゴル中東学会の S. Nyamzagd 会長の依頼による友情出演となったが、英語も堪能で、この大会の運営に大活躍を見せた。

最初の発表は韓国中東学会の Chang Byung-ock 前会長による“The Current State of Middle East Studies in Korea”と題する発表で、日本中東学会より 10 年早く、1976 年に設立され、近年の精力的な活動に目を見張られる韓国中東学会の歴史を一望させてくれた。次は私自身が“Nomads, Pastors and Tribesmen”の題名で発表を行った。2000 年の日本中東学会第 16 回年次大会公開シンポジウムの発表に、新たにモンゴル系遊牧民に関する資料と論考を加えた発表は、Lee Hee-soo 韓国中東学会会長など、人類学を専門とする研究者の関心は引けたようだが、この大会での発表としてはやや専門的にすぎたのは反省しきりである。本発表に対する Bayasakh 氏らの質問には、旧ソ連系の民族学の影響が色濃く見られ、政治学方面でのアメリカ志向と対照的であったのが印象深い。3 本目の発表は韓国の Hong Seong-min 氏の“Food Security and Water Resources in the Middle East”で、食料と水の安全保障に着目し、きわめて今日的な社会問題を中東について概観するものだった。最後に国立モンゴル大学の大学院学生 B. Baasankhuu 氏による発表“The Influence of Islam to Arabian Countries’ Politics”は、シャリーアが現代のアラブ諸国の政治に及ぼす影響を論じ、モンゴルでこの分野に取り組む若手研究者が出てきたことの頼もしさを感じさせるものだった。

以上の部会構成が、全体として一つのまとまりをもっていたとは無論言いがたい。個人的には、バクトリアにおけるラクダの乳利用やモンゴルと中東の遊牧経済を論じた発表が同時に進行している第 3 部会（経済）で行われたのが残念だった。

しかし、充分な外部資金の助成を得ることができず、一時は開催を危ぶむ声さえ洩れ聞かれたこの大会を立派に運営した様子を見れば、四つの中東学会がたがいを刺激して研究と学会活動の質を高めようとするアジア中東学会連合の目的は、これまでの大会以上に十全に果たされたと思われた。短い準備期間に会議を組織し、大会が始まってからは実に献身的に立ち働き、外国からの研究者に深い親愛の情を示してくれたモンゴル中東学会の会員と協力の研究者、学生たちには感謝の言を尽くせない。大会後の彼らの誇らしげな様子は、アジアに中東研究のネットワークを作りたいと考える私たちにとってもまた誇らしかった。北京で予定されている第 8 回大会に向け、すでに準備は開始されており、日本中東学会の会員としてさらなる協力を惜しむまいと、素直に思える大会であった。

最後に一言付け加えれば、アラブ世界の遊牧民を研究対象としてきたことから、いつかは訪れたいと思っていたモンゴルの地を踏む機会を与えられたことへの感謝の意もまた表せずにはおられない。大会翌日に 13 世紀のモンゴルを再現する国立公園へと、国立モンゴル大学のスタッフが私たちを連れて行ってくれた（残念ながら私市会長は仕事のため一足先に帰国して参加できなかった）が、これもまた楽しいと同時に絶好の学びの機会として忘れられないだろう。（赤堀雅幸）

『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会報告

『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会より、ご報告いたします。

1. 24-1号刊行のお知らせ

すでにお手元に届いていることと思いますが、24-1号が2008年9月に刊行されました。論文(英文1本、和文6本)のほか、酒井啓子会員とりまとめによる特集“Role of Electoral System in Non-Democratic Regimes”(英文3本)、岡本久美子会員とりまとめによる特集“The Perspectives of Arabic Literature: Beyond the Areas and the Ages”(英文3本)、書評1本が掲載されています。多くの投稿をいただきありがとうございました。会員の方で冊子がお手元に届いていない方がおられましたら、事務局にご一報ください。

2. 24-2号編集中

現在、24-2号の編集作業を鋭意進めております。来年1月の刊行予定です。なお、博士論文を提出された会員の方は、まだ24-2号に間に合いますので、英文要旨をぜひご提供ください。

3. 25-1号投稿受け付け中

次々号25-1号への投稿は12月20日まで受け付けております。論文、研究ノート、書評など、各ジャンルへの投稿をお待ちしています。そのほか、英文による特集の企画がありましたら、ぜひお寄せください。

4. 本年度の編集委員会の体制

編集委員会では、特集や書評にいつもの力を入れるために、副編集長を2人おくこととし、今年度後半より、山中由里子編集委員が新たに副編集長に就任いたしました。

5. 編集委員会への連絡用メール・アドレス

投稿ならびにAJAMESについてのご連絡は、次のアドレスをご利用ください。

ajames-editor@tufs.ac.jp

どうぞよろしく願いいたします。

(山口昭彦)

会員の異動

【新入会員】

Gül M.

Kurtoğlu-Eskişehir

【所属先・連絡先の訂正・変更】

新井 一寛

新井 和広

大野 元裕

岡本 恵

重親 知左子

木村 芙佐子

幸加木 文

高野 太輔

小村 明子

坂井 定雄

阪田 順子

佐島 隆

徳増 克己

中町 信孝

長谷部 圭彦

水谷 周

溝渕 正季

村山 さえ子
森田 豊子
山田 真樹夫

寄贈図書

【単行本】

高倉浩樹編『地域分析と技術移転の接点——「はまる」「みる」「うごかす」視点と地域理解』東北アジア研究シリーズ9、東北大学東北アジア研究センター、2008年。
『よくわかる納本制度——国立国会図書館は納本をお待ちしています』国立国会図書館、2008年。

【逐次刊行物】

『季刊アラブ』126号、日本アラブ協会、2008年。
『国立民族博物館要覧2008』国立民族学博物館、2008年。
『日本サウディアラビア協会報』220号、日本サウディアラビア協会、2008年。
『平成19年度報告書』大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト、2008年。
『NEWSLETTER』2号、グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」、2008年。
『NII Today』41号、国立情報学研究所、2008年。
Bulletin of the American Research Center in Egypt, no.193, American Research Center in Egypt (ARCE), Cairo, 2008.
Bulletin of the School of Oriental & African Studies, vol. 71 no. 1, School of Oriental & African Studies (SOAS), London, 2008.
Bulletin of the School of Oriental & African Studies, vol. 71 no. 2, School of Oriental & African Studies (SOAS), London, 2008.
Newsletter, no. 75, Research Centre for Islamic History, Art and Culture (IRCICA), Organisation of the Islamic Conference (OIC), Istanbul, 2007.
Syrian Studies Association Newsletter, vol. 13 no.2, Syrian Studies Association (SSA), Gainesville, FL, 2008.
The Iranian Journal of International Affairs, vol. 19 no. 4, Institute for Political and International Studies (IPIS), Tehran, 2007.

事務局より

これまで事務局を手伝ってくれていた関加奈子会員がモロッコに留学されました。関さん、1年半にわたりお世話になりました。ありがとうございます。9月からは、代わって小村明子会員にお手伝いいただきます。皆様、よろしくお見知りおきください。

アジア中東学会連合第7回大会も盛況のうちに終わり、予定より遅れてしまいましたが、年報24-1号も刊行され一安心です。第12期の理事会の任期も残すところ半年となりましたが、神戸での公開講演会を皮切りに(お近くの会員はぜひご参加ください)、今後も多くの学会行事が予定されております。気のゆるむことのないよう事務局も努力してまいりますので、会員の皆様にも、よろしくご協力をまわりたく存じます。

とくに、今年度は第13期の役員選挙が予定されています。選挙権は今年度分の会費を納入済みの正会員にありますので、会費に未納がある方は選挙権確定の前にぜひ会費をお納めいただけますようお願い申し上げます。しかも、近年、任期の変わり目に、理事会が事務局の引き継ぎに苦勞するようになってきた状況に鑑みて、今年度は従来よりも役員選挙の実施時期を繰り上げる予定ですので、お早めの対応をいただくと幸いです。通常ですと、次のニューズレターは年が改まって1月にお届けすることになりますが、上記の事情もあって、116号は年内にお手元に届きます。この点もよろしくご了解ください。(赤堀雅幸)

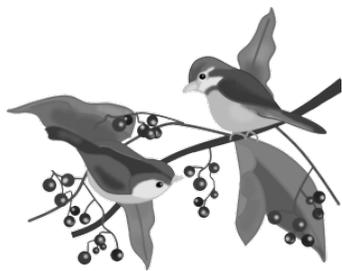
編集後記

読書の秋、芸術の秋、食欲の秋、天高く馬肥ゆる秋、女心／男心と秋の空・・・そして会員の皆様には講演会・研究会めじろ押しの秋、といったところでしょうか。

今号のAFMA参加記から、東アジアにおけるある種の「地殻変動」が中東研究の世界にも波及する兆しを読み取るのは、編集子だけではないでしょう。とかく「グローバル化」や「構造改革」の負の副産物ばかりに目が行きがちになる昨今ですが、グローバルなレベルでの社会的・経済的・学術的な構造変動は、私たちに新

たなエネルギーや推進力を与えてくれるものだ、と気づかされます。

今年度は評議員選挙があるので、昨年度より1号多くニューズレターをお届けします。日本国内の総選挙とともに学会の評議員選挙の行方にもご注目ください。(山岸智子)



会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2009 年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2008 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。なお、請求会費額は 2008 年 9 月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第115号

発行日 2008年10月10日

発行所 日本中東学会事務局

印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学アジア文化研究所気付

Tel & Fax: 03-3238-3693

Eメール: james@db3.so-net.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>

郵便振替口座:00140-0-161096(日本中東学会)

銀行口座:三井住友銀行渋谷支店(普)5346808

(日本中東学会 代表 私市 正年)